

「授業備品」N033 H. 29. 2. 8「学習指導要領改訂の基本的な方向性（西留の解釈）」（6県に配布中）

昨年 12 月に学習指導要領等改訂の基本的な方向性が示された。予想はしていたが「やはり」という思いがあった。これまでの学校教育の方針を肯定しながらも、「変わらざるを得ない内容」の提言である。学校現場を経験した者にとっては、今回の改訂内容は賛同することが多い。特に、教師による教え込みの授業から、子供たちが主体的・対話的で深い学びを行う授業への転換は必ず行わなければならない。

1 章 子供たちの現状

- ・一方で、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べること等については課題が指摘されている。学習したことを生活や社会の中の課題解決に生かしていくという面には課題がある。（子供たちの現状と課題）

2 章 予測困難な時代に一人一人が未来の創り手となる

- ・子供たち一人一人が予測できない変化に受け身で対処するのではなく主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福の人生の創り手となる力を付ける。（予測困難な社会）

3 章 生きる力の理念の具体化と教育課程の課題

- ・対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるときにも、他者の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働していくことができること。（生きる力）

教師の説明や指示が多い授業ではなく、子供たち自身が仲間と対話や議論をしていく授業が主となる。教師が話しすぎると子供の思考は停止する。教師は、教えるから気付かせる意識に変えることが重要である。

- ・現行学習指導要領は、各教科等において「教員が何を教えるか」という観点を中心に組み立てられており、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むためかは明確でない。このことが各教科等の縦割りを越えた指導改善の工夫や、指導の目的を「何を知っているか」とどまらず「何ができるようになるか」に発展させることを妨げている背景ではないか。（教科横断的な教育課程の検討）

明治以来、教師は教えることを主とした授業を行ってきた。そのため、子供が主体的に学ぶ授業への転換ができていない。長年の指導観の転換は難しいが、意識改革をすることが重要である。

- ・各教科等において何を教えるのかという内容は重要であるが、これまで以上にその内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。（改善に向けた課題）

授業中は、ミニ社会である。社会で必要な「表現力」や「協働性」を培うことを授業中で培うことを求めているのではない。話す、書く等の力を授業で付けることを子供や授業者に求めている。

4 章 学習指導要領の枠組みの改善と社会に開かれた教育課程

- ・各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育の目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。（総則の抜本的改善）

教科内容の指導は違ってよいが、教科経営（問題解決的な授業、学習過程）のユニバーサルデザイン化が必要である。一教科の目ではなく、教科横断的な視点で教科経営を行うとよい。

- ・生涯に向かって能動的に学び続けることができるよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。（主体的・対話的で深い学びの視点）

アクティブ・ラーニングの重要性を指摘している。教師主体の授業は、子供が受動的になりやすいので、一層子供主体の授業改善の取組を行うよう各学校へ促している。

- ・今回の改訂が目指すのは、学習内容と方法の両方を重視し、子供の学びの課程を質的に高めていくことである。単元や題材のまとまりの中で、子供たちが「何ができるようになるかを明確にしながら、「何を学ぶのか」という学習内容と、「どのように学ぶのか」という学びの課程を組み立てていくことが重要になる。（アクティブ・ラーニング）

これまでの教科内容を教えるだけの授業から、子供自身が主体的に学んでいく学習過程スタンダード等（教科経営）を作成し、子供の学びの過程の充実を求めているのではない。

第5章 何ができるようになるか

- ・全ての学習の基礎となる言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力などを、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことが重要である。（教科等の枠を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される能力）...

教科の枠を越え、教科横断的な「学び方」の授業を求めていると思われる。また、教育課程の編成に当たっては、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた学習過程のユニバーサルデザイン化を求めている。

- ・今回の改訂における教育課程の枠組みの整理は、各教科等で学ぶことを単に積み上げるのではなく、発達の段階に応じた縦のつながりと、各教科等の横のつながりを行き来しながら教育課程の全体像を構築していくことを可能とするものである。(資質・能力の育成)

各教科の横のつながりを求めていると思われる。また、縦のつながりを指摘している。学び方は全教科同じであるので、9年間で学び方を学ぶようにさせるとよい。

第6章 何を学ぶか、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成

- ・様々な資質・能力は、教科等の学習から離れて単独に育成されるものではなく、関連が深い教科等の内容事項と関連付けながら育まれるものである。(教科等間・学校段階間のつながり)

教科担任は、1教科の目で授業を見ることが多い。オンリーワンの考えになりがちである。各教科は関連しているの、言語活動や学習過程を統一して指導すれば、子供たちの学ぶ意欲や学力は向上する。

第7章 どのように学ぶのか、学習指導の改善・充実。

- ・子供たちは主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解する。こうした学びの質に着目して、授業改善の取組を活性化する。(学びの質の向上)

教室はミニ社会である。社会の中で生きていくために自分の意見を発表したり、課題解決に向かって協働的に学ぶことの授業展開を授業者に求めているのではない。

- ・特に小・中学校では、多くの関係者による授業改善の実践が重ねられてきている。他方、高等学校、特に普通科においては、自らの人生や社会の在り方を見据えてどのような力を主体的に育むかよりも、大学入学者選抜に向けた対策が学習の動機付けとなりがちであることが課題となっている。(学びの質に向けた取組)

受験型の授業の転換を促している。「暗記型学習、何を知っているか」からの転換である。社会の中で生きるうえでの対話力、主体的な生き方、自らを振り返る等の力を培う授業を求めている。

- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることである。①学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取組、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。②子供同士の協働、教職員の地域の人との対話、自己の考えを広げ深める対話的な学びが実現できているか。③習得・活用・探究という学びの過程の中で、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。(主体的・深い学びとは何か)

見通し、振り返り、子供同士の対話的な学び、考察(考え方を一本化していく練り上げ)が学習過程にあるかどうか。特に振り返りは重要であり、20字以上でまとめる等の指導が考えられる。

- ・アクティブラーニングについては全ての教科等における学習活動に関わるものである。(各教科等改善の視点)

学習過程スタンダード、ユニバーサルデザインの授業を全教科で行うことが重要である。教師主体の授業をアクティブラーニングに変えないと子供の学ぶ意欲や学力は向上しない。

第8章 子供一人一人をどのように支援するか

- ・通常の学級においても発達障害を含む障害のある子供が在籍している可能性があることを前提に、全ての教科等において指導の工夫の意図、手立ての例を具体的に示していくことが必要である。(インクルーシブ教育)

学習が分からない子へのきめ細やかな対応が必要である。分かるかどうかの意思表示(グーパー)、立ち歩きで分かる子から聞く等の対応策があるかどうか。全員がホワイトボードに書く方法もある。

第10章 実施していくために何が必要か

- ・教科等の枠を越えた校内研修の体制の一層の充実を図り、学校教育目標や育成を目指す資質・能力を踏まえ、「何のために」「どのような改善をしようとしているのか」を教員間で共有しながら、学校組織全体としての指導力の向上を図っていきることが重要である。(教員の資質・能力の向上)

質の高い校内研修を求めている。スペシャリストの教員の育成ではなく、学校組織全体の指導力の向上を図るための校内研修(全員の授業力アップ)を求めているのではない。

第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性

- ・義務教育9年間を通じて、子供たちに必要な資質・能力を確実に育むことを目指し、小・中学校間の取り組みを充実させる。小学校高学年は、専科指導を拡充する等により、中学校への接続を見据えた指導体制の充実を図る。(小学校と中学校との接続)

小中で学び方をユニバーサルデザイン化を図ることではないか。学び方が同じであれば子供たちは校種が変わっても授業に戸惑はない。異校種間の授業者の乗り入れ授業が考えられる。